

水素社会実現への橋渡し

産業技術総合研究所（産総研）に任期付き職員で入所して10年が過ぎ、3歳の娘を育てながら、つくばで研究開発を行っている。

男女関係なく仕事は内容と成果で評価されたいと考えていたので結婚しても「仕事は平等、家事もお金も半分ずつ」ということで夫の合意を得て仕事を続けてきたし、子供が産まれたら「育児も半分」が加わっただけという認識でいる。

娘を妊娠したときに先輩から「子供は10年くらい手がかかるよ」とアドバイスされた。

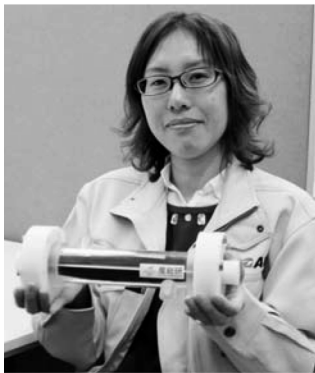
凛としていきる

理系女性の挑戦

夫婦で仕事も育児も平等に

仕事も大事だが、娘を長時間預けることもしたくない、両親はどちらも遠方で頼れない、という状況で、やはり仕事時間を変えなくてはと考えた。

研究の絞り込み、スツップの活用など考えうる手段をとって、育児は短く定時に帰る生活を10年続けることを



開発中の炭素膜と

夫も仕事を選択した。夫も仕事のやりくりをして、娘のお風呂の時間までに帰宅するようにになった。どれも完璧ではないが、私も夫も育児を心から楽しんでいる。飲み会もお互いに融通して参加しているし、仕事のピーク時は臨機応変に対応、時には出張に娘を連れていく。研究に集中できる職場や、職住近接が可能な土地柄もあるが、研究資金が、

夫は世間から見ればイクメンであり感謝しているけれど、夫婦で子育てをすることが「当たり前」の社会になることを願わずには

私は炭素材料からなる分離膜を使って水素やメタンといったガスを分ける技術を開発を行っている。分離対象が1ナノ（ナノは10億分の1）以下の分子なので、1ナノの

穴がある膜は欠陥品でつ膜を製品化して娘に見せたいなど考えている。

限られた時間で成果を出すには実験も評価も気が抜けない。任期付きの間はテニユア（終身在職権）取得に向けて論文重視の基礎研究だったが、現在は実用化を目指した企業との応用研究が中心である。性能に加えてコストやプロセスを考慮しつつ、他の技術にはできないオンリーワンを追求する開発は大変だが面白い。

研究プロジェクトが重なり最近では常に時間に追われているが、「丁寧かつ迅速」をモットーに水素社会の実現や温暖化防止に役立つ

「丁寧かつ迅速」をモットーに水素社会の実現や温暖化防止に役立つ



△プロフィール▽
産業技術総合研究所化学プロセス研究部門主任研究員
吉宗 美紀
△（火曜日に掲載）

△プロフィール▽
04年北海道大学大学院地球環境科学研究科博士課程修了、同年産総研入所。組織改編を経て現職。12年日本膜学会研究奨励賞受賞、13年石油学会奨励賞受賞。